

O-24 当院重症病棟における長期鎮静患者のせん妄発生状況とその要因に関する考察

東北大学重症病棟部

高田 望、五十嵐 陽子、新井 弘美、菊池 智子、斉藤 茜、
鈴木 敬司、亀井 ひとみ、草刈 亜紀子、吾妻 俊弘、星 邦彦

【背景】

鎮静薬はせん妄の原因となり、特に深い鎮静はせん妄の誘因となる。せん妄対策を目的とし、当院重症病棟患者のせん妄発生状況と鎮静レベルに関して調査を行った。

【対象と方法】

2004 年 6 月～2006 年 12 月に、当院重症病棟で麻酔科医師による呼吸管理を受けた患者 1227 例に対し、せん妄の有無・年齢・在室日数・男女比を調査。鎮静レベルの調査では、在室日数 7～30 日の症例に対し、当院で使用している東北大式スコア^①に加え、看護記録から Ramsay Sedation Scale（以下 RSS）に換算したスコアを使用し、相関を比較。各スコアは 3 以下の群と 4 以上の群に分類し、せん妄の発生・年齢・在室日数・男女比を比較。

注）東北大式スコア

- 1 覚醒している
- 2 うとうとしている
- 3 睡眠しているが呼びかけに応じる
- 4 完全に熟睡しており呼びかけに応じない
- 5 強い痛みでも覚醒しない

【結果】

1227 例中、せん妄を認めた症例は 327 例（26.7%）で、有意に年齢が高く（63.2 - 50.1 歳）、在室日数が長く（13.6 - 9.0 日）、男性に多かった（236 : 91 - 591 : 309）。在室日数 14 日以上では、228 例

中 90 例（39.5%）にせん妄を認め、年齢が高かった（67.5 - 53.4 歳）。東北大式スコアと RSS での回帰分析では $R^2=0.33$ と弱い正の相関を示した。東北大式スコアにおける、在室日数 7～30 日の比較では、3 以下の鎮静群と 4 以上の鎮静群に、せん妄の発生・年齢・在室日数・男女比での有意差はなかった。RSS における、在室日数 7～30 日の比較では、4 以上の群に有意にせん妄が多く（51.6%）、年齢が高い（69.6 - 59.8 歳）結果となった。在室日数 7～13 日では、4 以上の群で有意に年齢が高かった（70.4 - 62.0 歳）が、せん妄の発生に有意差はなかった。在室日数 14～30 日では 4 以上の群でせん妄発生が多く（70.5%）、年齢が高かった（68.0 - 53.4 歳）。

【考察】

年齢が高く、在室日数が長いほどせん妄を発生しやすい傾向がある。RSS においては、4 以上の深い鎮静で在室日数が長いほどせん妄を生じやすく、さらに年齢が高い傾向を持つ。このことから深い鎮静、長い在室日数、高齢はせん妄のリスクファクターであると考えられた。東北大式スコアは RSS との相関は認めるが、鎮静レベルはせん妄発生と関連していない。これは東北大式スコアを用いた鎮静レベル管理ではせん妄対策には不十分であることを示しており、その原因として、各スコアの換算が RSS に対して妥当でないことが考えられ、鎮静レベルによるせん妄対策には RSS の使用が妥当と考えられた。